仏像との出逢い

住職　黒田武志（大圓）

金もなく、托鉢をしながら日本一周の行脚をしていた時に、泊めていただいたお寺のおばあさんが、私におみやげをくださった。

それは五センチほどの小さな木彫りの観音さまで、私にとってははじめての、正式な仏像の勧請となった。

数年後、タイに修行に渡ろうという時に、念持仏として一葉観音を勧請しようと発願したのは、道元禅師が中国から帰られる時、嵐で船が沈みそうになった折、「念彼観音力」と観音さまを念じたところ、一枚の木の葉に乗った観音さまが天から降ってきて、波をしずめて船の難破を救ったという逸説から、これを自らの念持仏にしたいと願ったからだった。

ところが妙な縁で、造仏を依頼に行った仏師の方が、かたわらの不動明王を示しながら〝どこへでも持っていってくれ〟というのでワケを聞くと、ある日、見知らぬ年老いた婦人が訪ねてきて「お不動様をお迎えしろとおっしゃるので、四国から参りました。伺っておどろいたことに、夢のお告げと全く同じところです。どうか私にこのお不動様をお授けください」と懇願されたが、どうしたものかその方におゆずりする気になれず断ったものの、気にかかって仕方がないのだという。

困りはててい た時に、丁度私が行きあわせたのである。「どこへでも持っていってくれ」という言葉をいただいたのも縁であるならば、お不動様をお預りするのも与えられた縁であろう。

そう決意したものの、譲っていただくための金はなく、師匠（黒田白純）に頼み込んで何とか資金を調達し、むろん寺を持たない私は、本寺（光真寺）に願って、お不動さまを預かって、いただくこととなった。

その間、タイやアメリカを修行してまわり、小さな草庵にようやくお不動さまをお迎えしたのは、四、五年のちのことであった。

この不動明王は、身代わり不動と呼ばれるその名の如く、身を七つに変じて救ってくださるという。

禅宗では、霊的なものを重んじることはないが、私自身感得した不思議な縁もまた、仏のさし示して下さった道であろうと、この縁を大切に歩んできている。

身代わり不動明王をいよいよお迎えするという時、夢を見た。

総持寺が燃えている。これは大変だと師匠と共に総持寺にかけつけてみると、焼けてはおらず、勅使門のうしろの長廊下の中雀門のところに、お不動さまの台座だけが残っている。お不

横山善光寺
不動明王と両童子
三喜庵

動さまが身代わりになって自らを焼き、総持寺を救った、という夢であった。

それ以来、自坊は幾多の困難も切り抜けられるという確信を得て二十年を数える。

その後、タイ・ビルマ・中国の仏さまたちを、それぞれの縁を得てお迎えすることとなり、なかでも、善光寺釈迦殿の設計をして下さった伊藤喜三郎先生よりお預かりした円空仏は、「日限り不動明王」として、檀家の方々の礼拝の対象となっている。

笑っておられるから気味が悪いとおっしゃるので、善光寺でお預かりすることになった仏さまで、本当に笑っておられる。日々、その笑顔が変わる。

「日限り不動明王」とは、一日に千里の道を行って帰るといわれている。召し上がるものは洗米と芋類。じゃがいも、さつまいも、さといも、何でもよく、それに加えて昆布を召し上がる。そしてキュウリ十本に赤飯一升。大食の仏さまでもある。

毎月二十八日にこれをお供えしておまつりさせていただいているが、一日に千里の道もいとわず歩いて人々を救い、そしてまたこの寺に帰ってこられる。そんなご苦労をねぎらうのにはあまりにも粗末なお供えではあるが、心をこめて好物を供えることが、私の精一杯の感謝である。

不動明王は大日如来の眷属（けんぞく）である。この大日如来をお迎えするのも、私の使命であろうと、造仏を依頼し、開眼のはこびとなった。

縁もゆかりもない、一介の托鉢僧に贈ってくださった小さな一体の観音像が、たくさんの仏たちを呼びよせてくださり、いま、人々に救いの手をさしのべてくださることを思うとき、仏の縁の不思議と深さを思う。